

カリキュラム・授業開発コース科目
「秋田型アクティブラーニングの授業デザインと評価」

学びの概念図

2520401 伊藤 真里奈

2520402 大関 隆貴

2520403 小熊 大樹

2520404 小野 彰斗

2520405 工藤 唯花

2520406 佐藤 大星



2520407 清水 里沙

2520408 庄司 航

2520409 相馬 舜平

2520410 高橋 海渡

2520411 新山 壮一郎

2520412 三保 翔

秋田大学大学院教育学研究科教職実践専攻
2021年2月

小学校音楽科と外国語科におけるアクティブラーニングの授業デザイン

2520401 伊藤真里奈

音楽科：第3学年

単元：ひょうしとせんりつ

教材：ロジャーズ作曲〈エーデルワイス〉

①主旋律(上声部)を拍子を感じながら歌う。(日本語)
旋律のまとまりを捉えて歌う。(日本語)
主旋律を楽器で練習する。

②主旋律を歌ったり、楽器で演奏したりする。
副次的旋律をリコーダーで演奏する。
主旋律を拍子を感じながら歌う。(英語)《外国語科》

③主旋律を英語で歌ったり、副次的旋律と共に楽器で演奏したりする。

《外国語科》

曲の雰囲気話し合う。
グループで歌や楽器の演奏の仕方を工夫する。

④発表会で演奏を聴き合う。

指導の工夫

- 気持ちを盛り上げることができるよう、指揮をする。
- 曲のイメージがより豊かになるよう、映画「サウンドオブミュージック」の該当場面を提示する。
- 適切な速さについて理解することができるよう、比較して提示する。
- エーデルワイスの花のイメージを持つことができるよう、生息地、名前の由来、花言葉について説明する。《理科》

外国語科：第5学年

単元：Unit 3 What do you want to study?

(4/8)時間目

1. 〈エーデルワイス〉を英語の歌詞で歌う。《音楽科》
2. 【Small Talk】 What subject do you like?
3. めあて：なりた職業について聞き取り、友達と話し合おう。
4. 【Word Link】 教科
5. 【Let's Listen】 ②登場人物が学びたいことやなりた職業を聞いて、線で結ぼう。
6. 【Let's Try】 ③なりた職業について、友達とペアでたずね合おう。《音楽科》
7. まとめ

指導の工夫

- 自分なりにた職業を伝えることができるよう、自分を見つめ直す時間を設ける。《学級活動》
- 朝の会で〈エーデルワイス〉を英語で歌う。
- 自分事として捉えることができるよう、週の時間割を提示する。
- Picture Dictionaryにない職業も選択できるよう、イラスト付きの補助シートを用意する。
- 〈エーデルワイス〉に関連し職業で歌手を取り上げる。
- 諸外国に興味を持つことができるよう、アメリカの子どもたちに人気がある職業ランキングを提示する。

全体を通しての課題

- 〈エーデルワイス〉の楽譜を見て、曲の雰囲気に変化を持たせる作曲者の工夫を見つけるよう促す。
- 導入で〈エーデルワイス〉を英語で歌う際、教室内のオルガンで伴奏をする。
- 補助シートの職業の単語を学習する際、ただ繰り返しをする活動にならないよう、単語をさらに厳選したり関わる場面を増やしたりする。
- アメリカの子どもたちに人気がある職業ランキングを一方向的に提示するだけでなく、英語でヒントを与え、順位を一緒に考えながら完成させる参加型クイズ形式にする。
- 日本語を必要最小限にし、なるべく英語による指導を行う。

秋田型アクティブラーニングの授業デザインと評価 (保健体育) ～器械運動の授業実践から考える～

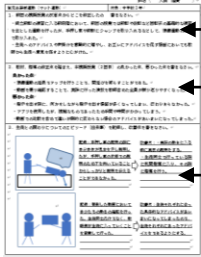
2520402 大関隆貴

保健体育体育科におけるアクティブ・ラーニングのイメージについて(平成28年2月 文部科学省)

- ・主体的な学び：見通しをもって粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる学びの過程の実現
- ・対話的な学び：他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げる学びの過程の実現
- ・深い学び：習得：活用・探求という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた学びの過程の実現

模擬授業の流れ

模擬授業Ⅰ→検討会→ビデオ観察と省察(省察カードを用いて)→模擬授業Ⅱ
 模擬授業Ⅱ→検討会→ビデオ観察と省察(省察カードを用いて)



- ← 前回の模擬授業の反省点から修正した点について
- ← 修正を踏まえ、模擬授業の良かった点、悪かった点について
- ← 生徒との関わりについてのエピソードとそれを踏まえて改善点について

省察カード

授業実践の内容

- ・ 単元名:器械運動(マット運動)
- ・ 対象学年:中学校2年
- ・ 本時:(5/8時間)
- ・ ねらい:倒立前転のポイントやコツを理解し、倒立前転ができるようになる。(思考・判断)
- ・ 本時の流れ



授業風景

学習活動

1. 集合・挨拶・出欠確認
2. 準備運動
3. 本時のねらいと内容の説明
4. 基本動作の練習(前転・後転・開脚前転の練習)
5. 倒立前転の練習(技のポイントを示した学習カードを利用し、実技をお互いに見合う)
6. 班活動にて倒立前転のポイントを確認
7. 全体で共有したポイントを踏まえて班ごとでもう一度練習
8. 学習の振り返り(振り返りを学習カード記入)

授業の工夫点

- ① 班の意見交換において学びを振り返る活動(主体的・対話的)
- ② 学習カードを用いて問題解決活動(対話的・深い)
- ③ タブレットを用いたICTの活用(主体的・対話的)

模擬授業Ⅰ

良かった点	改善点
<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の流れを板書において示した。 ・ ホワイトボードと学習カードの図の共有。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 班ごとの具体的な声掛け ・ 生徒の見取りの徹底。 ・ 倒立そのものへの補助教材の設定。 ・ 生徒との距離感(対話や指示、補助)



壁倒立でアップ



倒立前転の練習場面

模擬授業Ⅱ

良かった点	改善点
<ul style="list-style-type: none"> ・ 準備運動の延長でアップを行い、間延びを減らした。 ・ 動画を使うことで、振り返りがしやすくなった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指示を出す際にながらの指示になってしまい、伝わりづらくなってしまった。 ・ タブレットを使用して確認したが、手間や時間がかかってしまった。 ・ 助言があいまいになってしまった。



手押し車でアップ



演技の確認

模擬授業Ⅰの改善点とⅡでの実践

模擬授業Ⅰでは、班活動の場面において、生徒同士で倒立前転のアドバイスを行う形をとったが、教師から班活動への積極的なアプローチをすることができなかった。Ⅱでは班活動の場面においてタブレットを用いて動画を撮ることで、生徒自身の動きを振り返りやすくなった。また意識して教師から生徒同士の活動へと介入を心掛けた。



模擬授業Ⅰでの班活動



模擬授業Ⅱでの班活動

今後の授業実践に向けて

- ・ タブレットの使用方法的な簡略化アプリを使用し、比較やスロー再生を用いたが、生徒によっては、操作が難しいと感じる可能性も、先に操作方法を明記したマニュアルを作成するなど工夫をする。
- ・ 授業指示の徹底
動きながらの指示や手本を示しながら指示を出すことで、ながらになってしまい声が通らなくなってしまう。また、生徒が動きに注目すべきなのか、指示に耳を傾けるべきなのかわかりづらくなる。
指示と動きでメリハリをつけることを意識する。
- ・ 場づくり
授業の主となる活動前に行う補助運動の強度のバランス。また補助教材の設置し、運動のできる生徒、できない生徒どちらにも対応した環境作りを行う。エバーマットや跳び箱などの活用。

1. 授業で学んだ理論

- (1) アクティブラーニング（以下、AL）の定義
「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。」中教審答申（平成24）
- (2) 授業で学んだ大切にしたいこと
 - ①必要感ある学習課題の設定が求められる
 - ②ALは目的ではなく手段である
 - ③目的は児童・生徒の公民的資質（民主主義国家の一員に足る教養）の育成である
 - ④対立のよりよい合意（社会的統合・妥協）を目指す
 - ⑤授業イメージに基づいた学習環境の設定
 - ⑥学習の高次化（事実認識→価値判断→意志決定→社会参画）

2. ALの実践案

- (1) 単元名：「国民生活と福祉」
- (2) 単元のねらい：国や地方公共団体が果たす福祉政策の役割や問題点について多面的・多角的に考え、表現できる。
- (3) 単元計画：①政府の経済活動と租税 ②政府の財政政策 ③社会保障のしくみ（本時）
④少子高齢化と財政 ⑤公害の防止と環境の保全 ⑥単元のまとめ
- (4) 本時のねらい：国民皆保険制度の是非について多面的・多角的に考え、よりよい健康保険制度について意見することができる。
- (5) 本時の実際
 - ①導入：国民健康保険の果たす役割と、皆保険である健康保険料の負担が国民生活を圧迫している事実を知る。
学習課題「国民健康保険は皆保険のままでよいのか？」
 - ②活動（AL）「『国民健康保険には入るべき？』ゲーム」※指導上の留意点

○ゲーム開始前のルール説明

- 各グループ（4人）を1家族とし、教室内に9グループの設置を想定。
- 全ての家族の職業・月収を自営業・10万円で統一する。
※生徒間の職業差別の発生防止、健康保険料の支払いおよび支払いの是非に関する意志決定の感覚の実感、健康皆保険の意義を考えるというねらいに鑑む。
- ゲーム開始時の各グループの所持金は一律10万円とする。
- 毎月、教師によってクジを引かれた3つのグループが罹患する（罹患率1/3）
- 各グループは、健康保険への加入の有無を話し合って決める。
- 期待値計算の結果、保険加入/未加入グループそれぞれの各種金額は上図の通りに設定した。
- 病気に罹ったら、治療するかどうかグループで話し合って決める。治療した場合は一度で完治するものとする。
- 月収は、健康なグループは10万円だが病気のグループは5万円に半減し、治療しないかぎり5万円に据え置く。
- 生活費は病気の有無に関わらず全グループ5万円/月とする。
- 病気を治さなかったグループが翌月のクジで再び病気とされた場合は、病状の継続として扱う。
- 保険加入者が毎月納める保険金はホワイトボード上にプールし、保険加入者が治療費を払う際に4万5千円ずつ支払う。
- プールされた保険料が不足した場合、不足金額に応じて全9グループから税金を徴収し、保険料に補填する。
- 保険加入の更新は、10月（半年経過後）に1回のみ認める。
- 生徒の活動意欲を保つため、所持金がゼロ未満になったとしてもマイナス（負債）として記録し、ゲームを続ける。

	保険加入グループ	保険未加入グループ
治療費	5000円	5万円
自己負担額		
毎月の保険料	1.5万円	なし

○毎月（計12回）、以下の手順で作業を行う。

- ①収入：教師はクジを引き、病気の有無および継続期間に応じ、各グループに給料を渡す。
 - ②支出：
 - 健康保険に加入したグループは保険料1万5千円を教師に提出、それをホワイトボードに貼り付けてプールする。
 - 全グループは、生活費5万円を教師に提出する。
 - 病気の3グループは治すかどうか決め、治す場合は保険加入の有無に応じ、治療費を病院に支払う
- ※進行上の混乱防止のため、黒板上に各グループ数×12ヶ月の表を大きく提示し、毎月サイコロを振る度に1グループずつ順番に教師のサポートのもと計算し、黒板上に金額を明記していく。
※病気の有無、治療の状況、保険加入の有無、がひと目でわかるよう、黒板上の表ではカードを活用する。

③国民皆保険制度の是非、さらによりよい制度の案について考え、発表する。

- 予想される考え
 - 是・・・助け合いがないとお互いの関係が悪くなってしまうし、保険料の全員負担がないと医療が集まらない（効率）。全員加入を保つための保険料値下げは選択としてもある（公正）。
 - 非・・・他人の病気のために自分が税金を払うのはおかしい（公正）。保険料のほうが医療費よりも高い（効率）。

板書計画

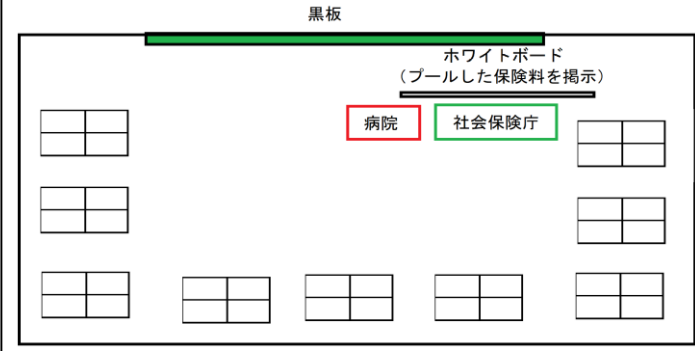
国民健康保険制度は皆保険のままでよいのか？

- 日本の健康保険制度
 - ・国民全員が負担した保険料を、医療を必要とする人の治療費に充てている。（国民皆保険）
 - ・負担額が大きく払えない人や、医療を利用しない人の不満がある。（2011年には納付率88%）

月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	13月	14月	15月	16月
1組	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保
2組	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保
3組	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保
4組	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保
5組	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保
6組	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保
7組	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保
8組	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保
9組	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保

今ままでよいのか？

教室内配置



3. 感想

- 国民皆保険制度への意見というテーマだったので、保険加入を選ぶといった意思決定や保険料のプールなどの現実的な設定は有効だと考えた。
- 対立（現行制度への不満）を合意（妥協）に向かわせる際に多角的（加入の有無）な視点から考えること（公正）や、財源を意識すること（効率）が、未来の社会人としての公民的資質の育成につながると考えた。
- 機会があれば実践し、改善を重ねたい。

秋田型アクティブラーニングの授業デザインと評価 国語グループ前半部での学び～ちいちゃんのかげおくりの教材分析、授業分析、授業の改善案の提案について～

2021年1月28日 カリキュラム・授業開発コース 2520404 小野彰斗

1. ちいちゃんのかげおくりの教材分析

はじめに ～教材についての概要～

「ちいちゃんのかげおくり」は光村図書で小学校3年生の教科書教材として扱われている。教科書では、場面を比べながら読み、感じたことをまとめることを主な内容としている。この教材は、「かげおくり」という遊びを題材にして、戦争の悲惨さや平和を願う作者の想いが綴られた作品である。本文は5つの場面から構成されており、特に最後の「それから何十年」かたった町の様子は現代に生きる私たちに平和の大切さとそれを守ることの尊さを示している。子どもたちにとって教科書で出会う初めての戦時下状況の文学作品である。当時の時代背景を正確に把握することは難しいと思われるが、情景や人物の言動が生生きと描かれているので、子どもたちはちいちゃんに感情移入し読み進めることが出来ると考えられる。さらに3つのかげおくりを比較してその状況を思い浮かべたり、五の場面の効果を考えたりすることで戦争の悲惨さや平和を願う作者の想いを感じ取ることができると考えられる。

本単元で児童に読み取らせたいもの

- 戦争時中の状況や悲惨さ
- 一の場面と四の場面の対比による効果
- 四の場面と五の場面の対比による効果 (5の場面の役割効果)
- 平和の大切さ
- ちいちゃんの気持ちの変化と読者の気持ちの変化

教材としての価値 (教材研究)

「ちいちゃんのかげおくり」の教材としての価値を8つ挙げる

- 空の形象性
- かげおくりという遊び
- 一の場面と四の場面の対比
- 四の場面と五の場面の対比と五の場面の効果
- きらきらわらい
- 色
- 言語感覚を養える多様な表現
- ちいちゃんがなくていくものと最後に得るもの

四の場面と五の場面の対比による効果 (5の場面の役割効果)

1)空の形象性

	第四場面の「青い空」の象徴	第五場面の「青い空」の象徴
1	奇跡の平和	当然の平和
2	死後の平和	生きている間の平和
3	現実離れしている平和	現実的な平和
4	命を奪ったのちの平和	命を奪わない平和
5	家族と再会できる平和	家族と再会する必要のない平和
	それでも同じ「青い空」	

5)きらきらわらい

第四場面のP25L4に「ちいちゃんは、きらきらわらいだしました」とある。この場面はちいちゃんが、家族との再会を果たすところである。しかし、実際にちいちゃんが自覚もないまま命をおとしてしまう場面である。ちいちゃんは死んでしまうが、その本人は自覚なくきらきらわらって家族のもとに走り出す。第五場面ではP25L11に「青い空の下、今日も、お兄ちゃんやちいちゃんぐらいの子どもたちが、きらきらわらい声を上げて、遊んでいます」とある。何十年後かの世界で子どもたちが遊んでいる場面である。この2つは同じ「きらきらわらい」だが対比して考えることができる。

	第四場面の「きらきらわらい」の象徴	第五場面の「きらきらわらい」の象徴
1	奇跡の喜び	当然の喜び
2	死後の喜び	生きている間の喜び
3	子どもたち多数の喜び	ちいちゃん一人の喜び
4	家族と再会できる喜び	家族と再会する必要のない喜び
5	それでも同じ「きらきらわらい」	

9)小さな女の子

- 不特定の呼称により、ちいちゃん以外の子どもの可能性が生じ、大勢の子どもたちが亡くなったことが表現されている
- 不特定の呼称により、ちいちゃん存在が希薄になり、亡くなった大勢の子どもたちの一人になるという虚しさが表現されている。
- 不特定の呼称により、ちいちゃんが亡くなるエピソードを締めくくる。
- 「小さな」と描写することで、ちいちゃんのおおよその年齢がわかり、体の小ささや生活能力の低さが表現されている
- 「小さな」と描写することで、未来ある命が亡くなることの悲惨さを表現している。
- 「小さな」と描写することで、命が亡くなることの儚さが表現されている。
- 「小さな女の子」と描写することでちいちゃんのことを指していることが分かる。
- 「女の子」と描写することで、力のない子どものうち、特に力のない女性であることが表現されている
- 年齢としても、性別としても「小さな女の子」は戦争からもっとも遠い存在であり、その命すら奪ってしまう戦争の悲惨さを表現している。

2. 実践授業の分析、全体計画

- 児童 秋田市立桜小学校 第3学年
- 単元名 「ブックハウスで交流しよう～わたしの「ずきん！」～「ちいちゃんのかげおくり」
- 目標
 - 自分物の気持ちや場面の移り変わりについて、想像したことを進んで書いたり話し合ったりしようとしている。
 - 場面の移り変わりに注意しながら、人物の行動、情景、会話などの表現をもとに想像して読むことができる
 - 作品中の多様な表現や感想を表すのに適切な言葉があることに気づくことができる。

全体計画

時	主な学習活動
2	1 「ブックハウスで交流しよう」という学習課題を設定し、学習課題を立てる。 2 題名から物語を想像し、範読を聞いて、あらすじを捉え、初発の感想を伝え合う。
7	3 かげおくりをする家族の様子や気持ちを考える。(一の場面前半) 4 お父さんが出征した後の家族の様子や気持ちを考える。(一の場面後半) 5 はぐれてひとりぼっちになったちいちゃんの気持ちを考える。(二の場面) 6 たった一人で家族を待つちいちゃんの状態や気持ちを考える。(三の場面) 7 一人でかげおくりをするちいちゃんの状態や気持ちを考える。(四の場面)
本時 9/12	8 2つの「かげおくり」を比べて話し合う。(一の場面と四の場面) 9 五の場面について話し合う。
3	10 いちばん心に響いた叙述(ずきん!)を見付け、理由も併せて「ブックハウス」にまとめる。 11 「ブックハウス」を紹介し合う。 12 単元全体の学習を振り返る。

3. 実践授業の分析 本時9/12

1)本時のねらい

- ・ほかの場面と比べながら五の場面の情景を想像して読むことができる

2)学習過程

学習活動	指導のポイント評価規準 (方法)
1 五の場面を音読し、他の場面との変化を見付ける (個→全体) ・前よりもいっぱい家がたっています ・ちいちゃんが一人でかげおくりをした所は小さな公園になっています ・青い空の下 ・きらきら笑い声を上げて遊んでいます	・見通しをもって取り組むことができように前時までの学習を振り返る場を設ける。 ・場面の移り変わりを捉えられるように、シートを準備する ・叙述から移り変わりを読み取ることができるように、サイドラインを引くように助言する ・他の場面と比較できるように、掲示物で振り返るように促す
2 本時の課題を確認する 一から四の場面とくらべて、五の場面からはどんなことが想ぞうできるだろうか。	
3 変化したところから想像できることを考え話し合いを、まとめる。(個→グループ→全体) ・前よりもいっぱい家がたっています。 →人が増えて楽しそう →家がいっぱい建ってにぎやかになった →戦争が終わって平和になった ・ちいちゃんが一人でかげおくりをしたところは小さな公園になっています →たくさん遊べてうれしそう →子どもがたくさんいて楽しそう ・きらきら笑い声をあげて遊んでいます。 →自由に遊べるようになって平和になった →たくさんの子供が遊んでいて幸せそう。	・サイドラインを引いたところから想像できることを書くよう声掛けをする ・五の場面の変化をとらえやすくするために、想像したことを2色で色分けして囲むよう話す (ピンク：明るい・平和、水色：暗い・寂しい) ・自分の考えを深めたり、新たに気付いたりすることができるように、グループでの交流の場を設定する ・聞くときは、自分の考えと比べながら聞くよう助言する。 ・作者の意図に気づき、より深い読み取りになるように、作者はなぜ五の場面をたけたのかという発問をする。
4 本時の振り返りをする。	五の場面について、他の場面との関わりをもとにして想像して読み取っている。(シート・発言) ・視点を明確に振り返ることができるように本時の読み取りから心に残ったことについて書くよう助言する。

改善点

- ・児童が必要感や意義を感じる活動を設定する
- ・子どもに国語の力をつけ、ねらいを達成するために、めあて、本文に戻ることが大事。
- ・主体的対話的で深い授業にするために、既習事項の活用、発問、揺さぶり、探究型授業大事にする
- ・作者はなぜ五の場面を付けたのかという発問を十分に子どもたちが考える時間を保証する
- ・課題につながる意味のある活動をする

全体計画の検討

- ・1時間目に学習課題の提示をするのはよいのではないか (ある程度読んでからのほうが妥当な学習課題が出やすい)
- ・ブックハウスの作る必要感とその効果
 - 上から降ってきた課題になっていないか、読書教育の充実に繋がるとは、教科内容としての意義は何か
- ・簡易から難易への流れを崩さない、初発の感想の更新が大事
- ・ブックハウス交流で学びを深めるところまで行けるのか?
 - 全体計画を見る限りただの交流のみで終わってしまう。それでは教育的効果は期待できないのではないか
- ・ブックハウスの活用方法を捉え直す (相手意識と目的意識)
 - ガイドブックとして扱う (知らない人に教えるのならば必要感や切実感が生まれるのではないか)
- ・変容のない学び=浅い学び
 - それだと子どもが学びの面白さや意義に気づきにくい
- ・子どもから疑問をもとに内容の読みをしていくのが基本。読み方を教えるための授業を展開していくべき
- ・子どもの力と課題の設定
 - 課題は子どもの力に合ったものか
- ・HOW TO型、LET'S型
 - 活動と教科内容とのつながりを検討する必要があるのではないか

4. 授業の改善案 (9/12)

(1) 本時ねらい

- ・ほかの場面と比べながら五の場面の効果について考えることができる。

(2) 学習過程

学習活動	指導のポイント評価規準 (方法)
0 今までの学習を振り返り、五の場面の直前の部分を確認する「ちいちゃんはきらきら笑い出しました。～夏のはじめのある朝こうして～」	・見通しをもって取り組みことができるように前時までの学習を振り返る場を設ける。
1 五の場面を音読し、他の場面との変化を見つける。 時間は? 出てくる人は? 場所は? 様子は? ・それから何十年 ・ちいちゃんが出てこない、お兄ちゃんやちいちゃんくらいの子供もたち ・ちいちゃんがかげおくりをしたところは小さな公園になっています。 ・青い空の下 ・きらきら笑い声をあげて 平和な様子が書かれていることを抑える	・場面の移り変わりを捉えられるようにシートを準備する ・叙述から移り変わりを読み取ることができるように対応する部分を丸で囲み線でつなげるように伝える。 ・他の場面と比較できるように、教科書を見るよう伝える ・五の場面からは水色とピンク色ならどちらのことが想像できそうか聞く。
2 本時の課題を確認する 作者が五の場面をつけた理由を考えよう。	・作者の意図に気づき、より深い読み取りになるように、作者はなぜ五の場面を付けたのかという課題を共有する
3 五の場面があることによる効果を考える。(個→グループ→全体) ・5の場面がないと昔の話で終わってしまう ・4の場面までだとちいちゃんたちの話で終わってしまうけど5の場面があることで時間的なつながりを感じる。 ・5の場面があるとちいちゃんの時代がどれだけ大変だったか、今がどれだけ平和なのかわかる ・5の場面があると、僕も平和を大切にしながらという気持ちになる	・自分が考えた根拠となる本文を示すよう伝える。 ・自分の考えを深めたり、新たに気付いたりすることができるように、グループでの交流の場を設定する。 ・聞くときは自分の考えと比べながら聞くよう助言する。 ・視点を明確に振り返ることができるように、本時の読み取りから心に残ったことについて書くよう助言する。
4 本時の振り返りをする。	

改善点

- ・めあての文言は「理由を考えよう」でいいのか。代案として「五の場面の効果を考えよう」もあるのではないか (読み手としてこのように感じたという児童の声を引き出せる)
- ・比較する際の観点はどうするか、比較する箇所はどうするか→五の場面があることで四の場面までで終わると比べてと読み手が物語とつながることを実感できるように比較する
- ・1～4の場面と5の場面を比べやすい教材の開発
- ・発問を明確に検討する

ALにおいて重要なことは？

ALの視点からの授業改善とは、「一人一人の個性に応じた**多様で質の高い学びを引き出すことを意図する**ものであり、さらに、それを通して**どのような資質・能力を育むかという観点から、学習の在り方そのものの問い直しを目指す**ものである。」（中央教育審議会「審議まとめ」、2016）p.26

学習指導要領・基本方針

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた**授業改善**

目的

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、図画工作科における授業改善を行う。

方法

「主体的・対話的で深い学び」の視点から、インターンシップ I で実施した授業を検討し、授業改善を行う。

対象：インターンシップ I（秋田市内A小学校）で実施した図工の授業（2020年10月27日2時間、2020年11月10日2時間）

検討日時：12月17日

- ・遠藤敏明先生、長瀬達也先生と共に授業の映像を振り返り、授業の検討を行う。
- ・検討した内容を基に、授業改善を行う。

検討した授業の概要

題材名：「新しゅの生きもの大はっ見！ーに〜し〜星にいったらー（立体）

2020年10月27日実施

に〜し〜星の生き物を想像し、生き物の「**感じ**」が伝わるよう、粘土を用いて**大まかな形**をつくる



2020年11月10日実施

2-C星の生き物の「**性格**」や「**気持ち**」などが伝わるよう**進化させる**



検討の結果

検討の結果、先生方から、参考作品についてご指摘をいただいた。

- **完成している参考作品を掲示することは、子どもの発想を狭めていた可能性がある。**対象の子ども達は、発想の豊かであったため、技能を工夫するヒントとなる程度の提示で良かった可能性が大きい。
- **子どもが参考にしたくなるような、魅力的なるものとする必要がある。**



図1, 図2：10月27日の導入で提示



図3：教室に掲示



図4：教室に掲示

ALの実現に向けて-改善した参考作品-

子ども達の発想を広げるような参考作品とするため、次の2種類の参考作品を作成した。

- ・子ども達が、**作品全体の形やポーズに着目できるような参考作品**



図5



図6



図7

- ・子ども達が、**作品の質感に着目できるような参考作品**



図8

- ・作成したものの、**参考作品として不十分だと考えられる作品**



図9



図10



図11

子どもが主体的に発想を広げられるような参考作品とするための視点として、次の4つが考えられる。

- ◆ **教師の意図は明確か。（「ポーズ」「質感」など）**
- ◆ **発達段階に合っているか。**
- ◆ **子どもにとって魅力的で、題材に合っているか。**
- ◆ **発想を固定化させていないか。**

主要参考文献

宮脇理（監）福田ら（編）（1991）「美術科教育の基礎知識」建帛社p.57
山口喜雄（編）（2018）「小学校図画工作科教育法」建帛社pp.68-69

理科と国語におけるアクティブラーニングと指導の工夫に関する考察

カリキュラム・授業開発コース 2520406 佐藤大星

<h2>1. 理科での学び</h2>	<h2>2. 国語での学び</h2>
<h3>i 活動内容</h3> <ul style="list-style-type: none"> ①理科のアクティブラーニングについての学びと教育の効果 ②指導案検討 ③指導案作成+指導案検討 ④授業検討 	<h3>i 活動内容</h3> <ul style="list-style-type: none"> ①国語のアクティブラーニングについての協議 ②授業研究 6年「海の命」 ③授業研究 1年「じどう車くらべ」
<h3>ii 理科のアクティブラーニングとは</h3> <p>実験・観察・話し合い≠アクティブラーニング</p>	<h3>ii 国語のアクティブラーニングとは</h3>
<h3>iii 指導案作成・検討の観点</h3> <p>○ねらいと評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ねらいと評価、めあてがかみあっているか ・子ども全員を評価できる方法か ・単元の特性や子どもの実態に応じたねらいになっているか <p>○導入</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもが日常生活と理科との関わりに気づけているか ・子どもが自ら課題を発見できているか、また発見できるような工夫をしているか ・子どもが興味をもって、活動に取り組めるような指導の工夫があるか 	<p>○展開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの反応や考えを具体的に予想しているか、またその予想と教師が考える望ましい反応に近づけるための指導の工夫はあるか ・安全に正確に実験、観察できるよう配慮されているか、 ・予想や考察につまづいている子どもに対してつまづきを無くすための工夫があるか ・生活経験や既存の知識から根拠をもって予想をたてることのできるような工夫はあるか ・ペアやグループ活動の意図はあるか ・思考を深めるための工夫があるか、また思考が明確になる工夫があるか ・子どもが主体的・対話的で深い学びができるような工夫はあるか <p>○まとめ・振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもが自分たちで今回の学びをまとめることができるような工夫はあるか ・振り返りの視点を明確に示しているか ・目的や意図をもって振り返りをさせているか
<h3>iv 理科のまとめ</h3> <p>子どもが何を考えているのか指導案段階で具体的に予想することで、指導の工夫がより具体的で効果的なものになる。</p>	<h3>iii 授業研究から得られた教師の指導の工夫</h3> <p>○6年「海の命」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの「困り感」を敏感に感じ取り、子どもの思考を助ける助言をする。助言…発問、指示、意味づけ ・大事な箇所は一斉読などを通して共有化を図る。 ・子どもの発言から次の問いにつなげる ・仲間との対話や考える時間をしっかり確保している。 ・黒板に全文を掲示し、子どもが今までどのような思考をしてきたのか分かるように、ペンで書き加える。(思考過程の明確化)
<h2>3. 学びのまとめ</h2>	<p>アクティブラーニングのための指導の工夫で理科と国語で共通して言えることは、①子どもの思考を教師が把握する、②子どもが自ら課題や疑問を持ち解決することができるように今までの学習との違いを明確にすること、③困り感で授業を構成していくことである。</p>

○1年「じどう車くらべ」

- ・今までの学習とは違う点に気づかせる→疑問や議論の場につながる
- ・黒板に全文を掲示し、文章ごとの関わりや、表現の共通点、相違点に気づかせる。
- ・一斉読させることで、挿絵だけでなく文や言葉にも着目させる工夫。
- ・失敗しても大丈夫な学級づくり
- 他者との対話の活発化
- ・紙芝居で4つの場面を表現することで、絵にできない場面の異質性(今回は「問」の場面)に気づかせる。

iv 国語のまとめ

国語は他の教科に比べて、思考が広がりやすい反面、まとまりにくいと感じた。そのため、焦点化させる指導の工夫が必要であり、それが思考の深まりにつながる。

また、教材間の違い、段落の違い、表現の違いなど様々な違いに気づかせることが、肝要である。

そのために……

教材研究が重要になってくる。

アクティブ・ラーニングとは何か

～「海の命」「じどう車くらべ」の授業を通して

2520407 清水里沙

1. アクティブ・ラーニングの考え方

- ① 課題解決型の授業
- ② 対話のある授業
- ③ 探究の過程
- ④ 思考力
- ⑤ 文脈性のある振り返り

2. 「海の命」の授業から

工夫1：間違い読み

…子どもの緊張をほぐす

注目すべき点にしぼることができる

工夫2：全文掲示

…本文に注目しやすくなる

読みの履歴を可視化することができる

工夫3：本文を大切にす

…本文に即した読みを実現する

子ども自身が文章を根拠に考えを

深められるようにする



3. 「じどう車くらべ」の授業から

工夫1：既習教材とのつながり

…既習教材「くちばし」を子どもと

振り返ることで、共通点や相違点を

比べながら読むことができる

工夫2：リレー読み

…子どもに本文を入れる

構造理解や集中を促す

文脈的に読むことができる

工夫3：関連読書

…教材についての前提知識を付ける

教科内容とつなげることができる



4. 講義を通して考えたこと

「海の命」、「じどう車くらべ」の授業を分析して、教材研究を深める重要性を改めて感じた。どちらの授業も、教師が「○ページ△行目」と声かけしたり、全文掲示を指し示したりすることで、本文に即した読みが実践されていた。とくに低学年のうちからこれが習慣化されていて、子どもの読む力や考える力がより伸びるだろうと思った。

今回の講義から、授業分析の視点も養うことができ、今後の教材研究や授業分析に役立てることができるように思う。

小学校社会科におけるアクティブラーニングの実践案

カリキュラム・授業開発コース 氏名庄司航

アクティブラーニングとは・・・

「学習者の能動的な参加を取り入れた授業、学習法の総称」(文科省)

- ① 主体性を持って学習する力が身に付く
- ② グループワークやディスカッションを通して、社会的能力が身に付く
- ③ 解決すべき課題を発見し、それを解決する力が身に付く

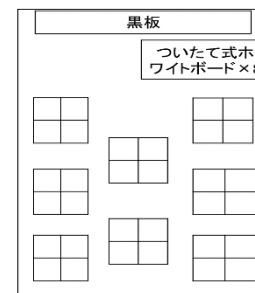
未知の状況でも創造的な発想で課題を解決できる人材の育成を目指している

アクティブラーニングを深めるには・・・

- ① 見方・考え方を反映させた授業内容
- ② 「真正な問い」の必要性
- ③ 教室環境の整備

・・・活動したかではなく、思考が動かされているか

	学習活動	教師の支援
導入	○避難した先での生活について知る。	○実際の避難状況について提示する。 ○避難状況の設定をする。
展開	避難所生活ではどんなルールが必要だろうか	
	○各班で選んだ場面について必要なルールについて、理由も含めて考える。(個→班→全体) ○各班から発表されたルールをもとに、ルール作りの際に重要だと思われることを考え、発表する。(個→全体)	○避難状況の中で意識したところを理由に書くように説明する。 ○ホワイトボードにまとめさせる。 ○発表から、避難所の様な集団での生活で必要ルールを考えるポイントを共通点として抽出する。
終末	○ふり返りをする。	○条件に合わせたルール設定の重要性について書かれた児童の記述を紹介する。



教室環境(欲しいもの)

ついたて式のホワイトボード
(決めたルールの理由まで含めてまとめるため)

ねらい

避難したときの状況を想定し、公共の場で他者と過ごすときのルールについて考えることができる。

全国学力・学習状況調査の分析(平均正答率)

	全体	学習指導要領の領域				問題形式		
		聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと	選択式	短答式	記述式
秋田県	57	69.1	30.8	58.4	45.5	72.7	45.7	8.0
全国	56.0	68.3	(参考値)	56.2	46.4	71.9	46.0	7.3

全国的に

- ① 話されたり書かれたりしている内容を聞き取ったり、読み取ったりすることは、おおむねできていると考えられる。
- ② 理解した内容を踏まえ、目的・場面・状況に応じて、話し手や書き手の伝えたいことは何かを理解するなど、**概要や要点を捉えること**に課題がある。
- ③ **基本的な語や文法事項等の知識を活用すること**に課題があり、与えられたテーマについてまとまりのある文章を書くときにおいても、**相手に伝わる英語で表現すること**ができていないと考えられる。
- ④ 話すことについては全体的に課題が多く、特に**即興でやり取りすること**に課題がある。

☆ 書くこと、話すことのどちらにおいても、問われていることが分かれば、**自分の考えなどをなんとか伝えようとする粘り強さや意欲**が見られる。

・ 基本的な語や文法事項等の知識の活用
・ 即興のやり取り



既習事項を生かしかつ日常生活に即した課題の設定

インフォメーション・ギャップ活動(模擬授業実践)

Who am I? Card A

	Bear	Snake	Tiger
食べるもの	Salmon	Mice	Rabbits
住む場所	Forest	Forest	savanna

Who am I? Card B

	Panda	Whale
食べるもの	Leaves	Fish
住む場所	Forest	Sea

インフォメーション・ギャップ
「自分は知っているが、相手は知らない情報をやり取りさせるような指導法」樋口・大城・國方・高橋(2010) 小淵(2010)は、インフォメーション・ギャップの活用により、**児童の学習意欲が高まり、児童同士のコミュニケーションを活性化**させることができる。

参考文献
・ 秋田県学力・学習状況調査(R1)
・ 全国学力・学習調査(R1)

やり取りの例
S1: I eat salmon. I'm so big. Who am I?
S2: I don't know. Where do you live?
S1: I live in the forest.
S2: Are you brown?
S1: Yes.
S2: Are you bear?
S1: Yes, I'm bear

生き物について2種類の異なるカードを受け取り、クイズに正解するために、友達とのやり取りを通じて生き物のヒントを得る。
ヒントを基に何の動物か推測する。クイズに正解したら、今度はSiがS2に質問して、ヒントを得る。

課題～模擬授業実践を通じて～

- ・ Target sentenceを使ってやり取りを行えていなかった
- ☑ 活動の吟味→カードの項目の精選をすべき
- ・ インフォメーション・ギャップ活動に至るまで児童のリピートが多かった
- ☑ 単にリピートするだけだとドリル学習になってしまう

児童と教師のやり取りを増やしてやり取りの中で表現の定着を図ること、思考力の育成が大事

- ・ 目的・場面・状況が日常生活に直結していない
- 題材の発展や見直しが必要
- 例) 全世界の生き物について考える
- 日本にしかない動物などを扱う

アクティブラーニング

主体的：子どもたち主体

対話的：子どもたち同士、教師とのコミュニケーション

深い学び：目的、場面、状況に応じて、既習事項を適切に運用すること

教科横断的視点から考える、アクティブラーニングの在り方

2520410 高橋海渡

●理科（前半）での学び●

1. 観察・実験に対する興味の構造

- 体験志向
- 知識獲得志向
- 思考活性志向



深い学びへ



2. 効果量 (d)

…教育的介入の効果の大きさを数値化したもの
($d=0.0\sim0.1$ →低 $d=0.1\sim0.4$ →中 $d=0.4\sim1.2$ →高)

<直接教授 ($d=0.59$)>

- ①教師が学習目的を決める。
- ②学習者にとって分かりやすいものにする。
- ③学習者に対してどうなればよいかを実際にやって見せる。
- ④理解できたかを学習者自身による表現から評価する。
- ⑤まとめで単元の内容を別の形で説明し学習を統合する。

<探求的指導 ($d=0.31$)>

- *ここで述べる「探求的指導」とは学習過程を子どもが行う指導である。
- ・内容面への効果より、思考面への効果が大きい。
- ・効果は小学校で最も大きく、学年が上がるにつれて小さくなる。

●国語（後半）での学び●

1. 教材分析「海の命」(小学校6年生)

○子どもの意見を尊重した、授業コーディネート

👉 Point 👈
児童の意見をあらかじめ把握しておく。

➡ 意図的に児童を指名し、児童の思考を十分に促していた。
→すぐに答えにたどり着かないので「深い学び」に!

○児童全員がついてこれるような授業

👉 Point 👈
何度も本文に立ち返るような声がけをする。

➡ 児童から意見がでるたびに、「本文のどこに書いている?」と声掛けをしていた。
→意見の共有化

2. 教材分析「じどう車くらべ」(小学校1年生)

○既習事項を活かした文の読み方

👉 Point 👈
既習内容を教室内に掲示する。

➡ 本時の文章と前時の文章の構成を比較していた。
→学びのつなぎ

●アクティブラーニングの在り方●

☆「思考すること」をアクティブにしなければならない→「活動あって学びなし」にしてはいけない!

☆目的意識をもってアクティブラーニングの授業設計をしなければならない

→「とりあえずやっておこう」はだめ! 児童の実態や授業の目的に合わせて授業形態を変えること!

☆子どもに「深い学び」をさせるためには、教師も「深い学び」をしなければならない!

→子どもの反応を予測すること! 「データ」と「感覚」の両刀で授業設計をすること!

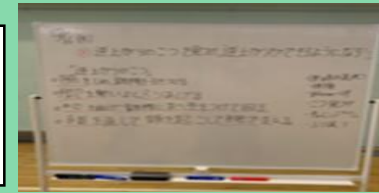
アクティブラーニングを取り入れた体育授業に関する考察

～模擬授業及び省察を通して～

2520411 新山壮一郎

体育科・保健体育科におけるアクティブ・ラーニングのイメージ(体育)【平成28年体育・保健体育、健康、安全WG】

- ・主体的な学び・・・見通しをもって粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる学びの過程の実現
- ・対話的な学び・・・他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げる学びの過程の実現
- ・深い学び・・・習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた学びの過程の実現



「模擬授業の概要」

単元名：器械運動(鉄棒運動)

本時：3/7

対象：小学校5年生

ねらい：逆上がりのコツをおさえ、逆上がりができる。

<本時の流れ>

1.場づくり、準備運動

2.Warm-up

3.めあての確認

4.逆上がりのコツを見付ける⇒教師の演示

- ・脇を締め鉄棒を引き付ける。
- ・脚を勢いよく振り上げる。
- ・肘を曲げ、鉄棒におへそをつけて回る。
- ・手首を返して頭を起こして手で支える。

5.チャレンジタイム

- ・逆上がり
- ・後方支持回転(発展技)
- 6.振り返り

模擬授業Ⅰ

良かった点	改善点
<ul style="list-style-type: none">・逆上がりができなかった児童をほめている。・児童同士の教え合いの場がある。・補助器具の用意。	<ul style="list-style-type: none">・Warm-upの内容。・指導するコツを明確にする。・補助の仕方の指導。・板書や説明の際に児童に背中を向けている。

模擬授業Ⅱ

良かった点	改善点
<ul style="list-style-type: none">・前回の反省点の改善。・児童への積極的声掛け、関わり。・板書を何度も繰り返し使用。	<ul style="list-style-type: none">・だんごむしのぶら下がり時間の配慮。・板書と同じようにワークシートも穴埋めにする。

模擬授業改善内容(I→II)

- ・Warm-up 豚の丸焼きじゃんけん→だんごむシ、足抜き回り
- ・コツを明確にして、そのコツを児童から引き出すために、演示に加えて、穴埋めの板書も用意した。
- ・児童同士の補助の仕方を演示。
- ・見本を見せるときに、鉄棒の逆側に立って児童が見えるようにして話をした。



<今後の授業実践に向けて>

- 1.楽しく学習を進める。→運動時間の確保。励まし合い・助け合いの雰囲気。ゲーム形式の導入。
- 2.苦手な児童への指導、配慮。→直接指導。教え合いの場。下位教材の充実。
- 3.「できた」が実感できるようにする。→個人に合った課題設定。自らの成長を確認できる学習シート。

模擬授業(跳び箱運動)から考える体育におけるアクティブラーニング

カリキュラム・授業開発コース 252412 三保 翔

体育科におけるアクティブ・ラーニングのイメージ(平成28年2月10日、体育・保健体育、健康、安全WG)

- ・深い学び : 習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた学びの過程の実現
- ・対話的な学び: 他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げる学びの過程の実現
- ・主体的な学び: 見通しをもって粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる学びの過程の実現

模擬授業実践の実際

単元 : 器械運動(跳び箱運動)
対象 : 小学校5年生
本時 : 2/6時間目
ねらい: 開脚跳びの簡易運動から開脚跳びのポイントについて知り、ポイントをふまえた開脚跳びができる。

利用した簡易運動



脚を開いたかえる跳び 跳び箱を二つ使った指導

学習活動の流れ

- 1 準備運動
- 2 めあての確認
- 3 開脚跳びの簡易運動
- 4 開脚跳びのポイント確認
- 5 助言しあいながら練習
- 6 振り返り

体育における対話的な学びであり、深い学びにもつながる。

対話的な学びにおける模擬授業の考察

授業 I における改善点

- ・情報量が多く、ポイントを意識した練習ができていない。
→助言する際に曖昧な助言になる。
- ・児童同士の助言の場面で、授業者の関りが少ない。

授業 I の省察をふまえた実践

- ・ポイントを精選し、板書を改善
- ・跳び箱にテープを貼り、ポイントを意識できるように改善
- ・児童との関りを増やし、児童の助言から対話を広げることができた。

今後の授業実践に向けて

体育の対話的な学びの場面は少ない
→限られた場면을充実させることが重要

- ・児童が助言を焦点化できるようにコツやポイントを簡潔にする。
- ・コツやポイントを意識できるように視覚的な支援を行うことができる場づくりをする。
- ・児童同士の対話の場面で、授業者も積極的に関りを持ち、考えを広げる。

